

## Positive Thinking で乗り切ろう！

文化交流論

増田 薫（村田製作所）

タイトルのとおり、私は‘考える’ことは大好きですが、‘悩む’ことがどうにも性に合いません。自分のこと、将来のこと、そして職業のこと、就職活動中に私が実践していた Positive Thinking を紹介して、体験談としたいと思います。

私をはじめ就職活動というものを意識したのは、2回生の春くらいだったでしょうか。サークルの先輩から具体的な体験談とともに、就職活動に関する諸々の噂を耳にし、率直に大変そう、と思った記憶があります。しかし、毎年いろんな先輩の話を聞くうち、何でも自分で経験してみないと気が済まない私は、自分の番というものをどこか待ち遠しく思うようになっていました。来るべき就職活動の期間を、不安とともに迎えるのではなく、楽しみにしながら待つ、それが私の第一の Positive Thinking だった気がします。企業や社会という未知の世界との、また新しい多くの人との出会いもさることながら、活動を通じて味わう試練でさえ自分を成長させる糧だと思えば、前向きに就職活動に取り組めるのではないのでしょうか。

3回生を修了した時点で休学しアメリカへ語学留学したため、私の就職活動は1年遅れとなるのですが、帰国後のゴタゴタより実際に活動をスタートしたときは、すでに2001年の2月でした。企業の採用活動が年々早まる傾向を見せる中で、この時期に始めるなんて遅いのでは？と思われるかもしれませんが、海外展開に積極的なメーカーへ行きたいという希望がある程度定まっていた私に、特に焦りはありませんでした。サークルの先輩はもちろんのこと、アメリカで出会った多くの日本人の友人から聞いていた職業観が私なりの業界研究や自己分析になっていたのだと思います。

かくして4月末に終止符を打つまでの3ヶ月弱、私は念願の就職活動なるものに全力投入し、幸いにも当初の希望に沿う形での結果を得ることが出来ました。ただ、そのプロセスは決して平坦なものではなく、どちらかというところ‘試練’の連続だった気がします。それにも関わらず、常に前向きな気持ちを維持できたのは、おそらく Positive Thinking の実践を心掛けていたからでしょう。例えば、選考の途中で落ちたとき（私の場合、しょっちゅうでした）、なぜダメだったのか考えることはもちろん必要です。緊張しすぎていた、相手（企業）自分に対する研究が足りなかった等、様々な理由が思い浮かぶでしょうが、そこで悩んだり落ち込んだりする必要なんで全くありませんし、仮に素の自分を出しきれたのであれば、その相手とは単に相性が合わなかったに過ぎません。よく言われるように、就職活動とは企業による学生選考の場のみならず、学生による企業選考の場でもあるので

すから。

その他の2つのテーマについて挙げておきます。まず、女子学生は不利か？私は女子学生であることをハンデに感じたことはありませんでした。現在の不況下、性別だけを理由に企業が学生の採用・不採用を決める余裕なんてない筈ですし、女性の方が働き続けることが困難な現実を前に、否応なく自分の将来を考えさせられた点では、恵まれていた気もします。

また、国際文化学部は不利か？これは全くの逆で、私にとっては有利に働いてくれました。内定先の村田製作所の面接でのこと。主に勉強の内容についての質問を受けるのですが、国際文化学部で扱う学際的なテーマは比較的新しい研究分野なので、質問をする面接官のなかにも専門家がいません。先に面接を終えた学生から脅されていたほどには、厳しく突っ込まれることもなく、むしろかなりの手ごたえを感じることができました。要は、自分の学んできたことを自分の言葉で表現すること、これがきちんとできれば学部の違いなんてハンデになりません。

ものは考えよう、という表現がありますが、どうせ考えるなら何でも良い方に！が私の持論です。発想の転換を上手く使って、ともすれば暗いイメージが付きまといがちな就職活動の期間を明るく過ごしてみてください。みなさんが納得のいく就職と就職活動という貴重な経験を得られることを祈っています。(2001年12月)